

## [A年] 公現後第5主日(2025年2月9日)

## 【旧約聖書日課】イザヤ書 6章1~12節

1ウジヤ王が死んだ年のことである。わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっぱい広がっていた。2上の方にはセラフィムがいて、それぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって足を覆い、二つをもって飛び交っていた。3彼らは互いに呼び交わり、唱えた。

「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。」

「主の栄光は、地をすべて覆う。」

4この呼び交わす声によって、神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神殿は煙に満たされた。5わたしは言った。

「災いだ。わたしは滅ぼされる。」

わたしは汚れた唇の者。

汚れた唇の民の中に住む者。

しかも、わたしの目は王なる万軍の主を仰ぎ見た。」

6するとセラフィムのひとりが、わたしのところに飛んで来た。その手には祭壇から火鉢で取った炭火があった。7彼はわたしの口に火を触れさせて言った。

「見よ、これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」

8そのとき、わたしは主の御声を聞いた。

「誰を遣わすべきか。」

「誰が我々に代わって行くだろうか。」

わたしは言った。

「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。」

9主は言われた。

「行け、この民に言うがよい

よく聞け、しかし理解するな

よく見よ、しかし悟るな、と。」

10この民の心をかたくなにし、  
耳を鈍く、目を暗くせよ。  
目で見ることなく、耳で聞くことなく、  
その心で理解することなく、  
悔い改めていやされることのないために。」

11わたしは言った。

「主よ、いつまででしょうか。」

主は答えられた。

「町々が崩れ去って、住む者もなく

家々には人影もなく

大地が荒廃して崩れ去るときまで。」

12主は人を遠くへ移される。

国の中央にすら見捨てられたところが多くなる。

## 【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 1章18~25節

18不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。19なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。20世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。21なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。22自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、23滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです。24そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ、そのため、彼らは互いにその体を辱めました。25神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拝んでこれに仕えたのです。造り主こそ、永遠にほめたたえられるべき方です、アーメン。

## 【福音書日課】マタイによる福音書 13章10~17節

10弟子たちはイエスに近寄って、「なぜ、あの人たちはたとえを用いてお話しになるのですか」と言った。11イエスはお答えになった。「あなたがたには天の国の秘密を悟ることが許されているが、あの人たちは許されていないからである。12持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。13だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである。14イザヤの預言は、彼らによって実現した。

『あなたがたは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。』

15この民の心は鈍り、

耳は遠くなり、

目は閉じてしまった。

こうして、彼らは目で見ることなく、

耳で聞くことなく、

心で理解せず、悔い改めない。

わたしは彼らをやさめない。』

16しかし、あなたがたの目は見ているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ。17はっきり言うておく。多くの預言者や正しい人たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞いたかったが、聞けなかったのである。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## イザヤ書 6章1～12節

「ウジヤ王が死んだ年、私は、高く上げられた玉座に主が座っておられるのを見た。その衣の裾は聖所に満たしていた。<sup>2</sup>上の方にはセラフィムが控えていて、それぞれ六つの翼を持ち、二つの翼で顔を覆い、二つの翼で足を覆い、二つの翼で飛んでいた。<sup>3</sup>そして互いに呼び交わして言った。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな  
万軍の主。」

その栄光は全地に満ちる。」

<sup>4</sup>その呼びかける声によって数居の基が揺れ動き、神殿は煙で満ちた。<sup>5</sup>私は言った。

「ああ災いだ。」

私は汚れた唇の者

私は汚れた唇の民の中に住んでいる者。」

しかも、私の目は

王である万軍の主を見てしまったのだ。」

<sup>6</sup>するとセラフィムの一人が私のところに飛んできた。その手には祭壇の上から火箸で取った炭火があった。<sup>7</sup>彼はそれを私の口に火を触れさせ、言った。

「見よ、これがあなたの唇に触れたので過ちは取り去られ、罪は覆われた。」

<sup>8</sup>その時、私は主の声を聞いた。

「誰を遣わそうか。」

誰が私たちのために行ってくれるだろうか。」

私は言った。

「ここに私がおります。」

私を遣わしてください。」

<sup>9</sup>主は言われた。

「行って、この民に語りなさい。」

『よく聞け、しかし、悟ってはならない。』

よく見よ、しかし、理解してはならない』と。

<sup>10</sup>この民の心を鈍くし

耳を遠くし、目を閉ざしなさい。

目で見ず、耳で聞かず、心で悟らず

立ち帰って癒されることのないように。」

<sup>11</sup>私は言った。

「主よ、いつまでですか。」

主は言われた。

「町が荒れ果て、住む者がいなくなり

家には人が絶え

その土地が荒れ果てて崩れ去る時まで。」

<sup>12</sup>主は人を遠くに移し

見捨てられた所がその地に増える。」

## ローマの信徒への手紙 1章18～25節

<sup>18</sup>不義によって真理を妨げる人間のあらゆる不敬虔と不義に対して、神は天から怒りを現されます。<sup>19</sup>なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らには明らかだからです。神がそれを示されたのです。<sup>20</sup>神の見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造以来、被造物を通してはっきりと認められるからです。したがって、彼らには弁解の余地がありません。<sup>21</sup>なぜなら、彼らは神を知りながら、神として崇めることも感謝することもせず、かえって、空しい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。<sup>22</sup>自分では知恵がある者と称しながら愚かになり、<sup>23</sup>不滅の神の栄光を、滅ぶべき人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです。

<sup>24</sup>そこで神は、彼らが心の欲望によって汚れるに任せられ、こうして、彼らは互いにその体を辱めるようになりました。<sup>25</sup>神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拝んでこれに仕えたのです。造り主こそ、永遠にほめたたえられる方です、アーメン。」

## マタイによる福音書 13章10～17節

<sup>10</sup>弟子たちはイエスに近寄って、「なぜ、あの人たちはたとえを用いてお話しになるのですか」と言った。<sup>11</sup>イエスはお答えになった。「あなたがたには天の国の秘儀を知ることが許されているが、あの人たちは許されていないからである。<sup>12</sup>持っている人はさらに与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。<sup>13</sup>だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、悟りもしないからである。<sup>14</sup>こうして、イザヤの告げた預言が彼らの上実現するのである。

『あなたがたは聞くには聞くが、決して悟らず見るには見るが、決して認めない。』

<sup>15</sup>この民の心は鈍り

耳は遠くなり

目は閉じている。

目で見ず、耳で聞かず

心で悟らず、立ち帰って

私に癒されることのないためである。』

<sup>16</sup>しかし、あなたがたの目は見えているから幸いだ。

あなたがたの耳は聞いているから幸いだ。<sup>17</sup>よく言

っておく。多くの預言者や正しい人たちは、あなた

がたが見ているものを見たかったが、見ることがで

きず、あなたがたが聞いているものを聞きたかった

が、聞けなかったのである。」

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・2月9日「公現後第5主日」の日課主題は「たとえて語るキリスト」。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、預言者イザヤの召命譚の箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、冒頭挨拶の延長として記された不義に関する基本的な考えを提示する箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、「種蒔きのたとえ」を巡ってたとえを用いて教える理由を説明された箇所。

**旧約日課(イザヤ6章より)**

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一に置かれた預言文書。前8世紀後半に南王国ユダの四代の王(ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ)に宮廷預言者として仕え活動した祭司「イザヤ」の預言句集と活動記録によって構成されている。ただし、40章以下は後代(前6世紀)に「イザヤを模範とした祭司預言者の伝統を継承する集団」の手で付加された預言句集と考えられている。歴史的な宮廷預言者イザヤが預言活動をしていた前8世紀は、アッシリアの軍事行動が活発化する中で北王国イスラエルが滅亡していった時代。長く北王国の従属国として維持されていた南王国ユダは、北王国との関係を絶ち、アッシリアに朝貢する属国として生き残る道を選び、王国を存続させた。その一連の政治的決断に際して、イザヤは宮廷預言者として歴代の王に助言する立場にあった。日課箇所は、イザヤが一介の宮廷預言者に留まらず、王の助言者としての特別な地位(首席預言者?)に就いたことを示唆しているものと考えられる。

・日課箇所の6章では、預言者が一人称「わたし」を主語にして語る文体となっているが、同様の文体は8章でも用いられているが、この二つの章に挟まれた7章には、年代記風の文体で「イザヤ」と「アハズ王」の説話が置かれている。年代記風の文体による説話は、ほかに20章および36~39章に置かれている。

・日課箇所は、一般に「イザヤの召命」譚と呼ばれてきた。同様の「召命」譚は「エレミヤ書」や「エゼキエル書」にも見られ、一人称「わたし」を主語にしていることから、「個人的な信仰体験を伴う召命の出来事」と解されるのが一般的であるが、それを現代的な視点で「個人の内面における信仰体験の証し」と解するのは必ずしも適当ではない。日課箇所は、預言者が祭司として神殿で祭儀にあずかっていることを示す描写をしており、この出来事が実際には何らかの(おそらく預言者としての任職に関する)儀典として執り行われたことであって、一連の対話も典礼として形式化された枠組みの中でなされているものと解することができる。つまり、イザヤは、宮廷預言者(の長)としての大きな権限を付与されるにあたり、謙卑の姿勢を示した上で聖別の儀式を経て、任命、派遣されたのである。

・冒頭の「ウジヤ王が死んだ年」は、通説では前742年頃のこと。ウジヤ王は、「列王記」では「アザルヤ」とも呼ばれている王(王下15:1~7)のことで、長期にわたって(「列王記」では「52年」とされている。通説では40数年)王位にあったとされるが、「列王記」の記述によれば中途からは王子ヨタムが摂政として事実上の統治をしていた。預言者イザヤも、形式上はウジヤ王の時代から活動したことになっているが、実質的にはヨタム王(王子)によって宮廷預言者に登用されたものと推認される。おそらく、ヨタム王(王子)の側近として仕えることを通して、後代の王たち(アハズ王、ヒゼキヤ王)に対して強い影響力を行使し得る立場になったのであろう。

・日課箇所情景描写されるのは、エルサレム神殿の聖所内部の様子。「セラフィム」は、「イザヤ書」にしか現れないが、「ケルビム」(イザヤ37:16。他、旧約正典中では多数用例あり)と同じ、またはこれに類するものを指して言われていると考えられる。「ケルビム」は、アッシリアなどを中心に広く古代オリエントで知られている有翼人面獣身の守護者「クリーヴ」を起源としていることが確実である一方、「セラフィム」は、メソポタミア・カルデア神話に見られる稲妻の精「セラピム」を起源とするものと推認されている。「ケルビム」は、ソロモン王の神殿建設に関する記事(王上6章)にも詳しく記述されているように、エルサレム神殿の至聖所に置かれた「神の箱」の上蓋に像として取り付けられていたほか、聖所内の主要な文様・像として多用されていたと考えられている。アッシリア等における「クリーヴ」は、それ自体が神ではなく、神の「乗り物」として位置づけられる存在である。日課箇所が「ケルビム」ではなく「セラフィム」を描くのは、「ケルビム」とは異なる役割の者(祭司?)を示唆するためかもしれない。

**使徒書日課(ローマ1章より)**

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。日課箇所は、二週前の使徒書日課に続く箇所であり、本書に関する基本的な理解は、資料「聖書と祈りの会 250122」を参照。

・パウロは、本書簡でユダヤ人と異邦人に共通の普遍的な救済論を提示しようとしているが、その論考の出発点として、「不義」の普遍性を明らかにしようとする。日課箇所は、その「不義」の問題を提起している。「不義(アディキア)」は、「(神の)義(ディカイオシュネー)」(1:17)の対義語として取り上げられている。つまり、「神=義」と「人=不義」という基本図式が、個々からの議論の出発点である。

・18節直訳「真理を不義の中に閉じ込めている人間のあらゆる不敬虔と不義に対して、天から神の怒りが示されている」。

・23節「滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像」は、必ずしも造られた偶像を意味しない。「似せた像(エイコン)」は、8:29「(御子の姿に)似たもの」と同じ語。「エイコン」は、「アイコン」「アイコン」の語源。

## 福音書日課(マタイ 13 章より)

・日課箇所は、「種蒔きのたとえ」から始まる一連の教えの一部。「たとえ」と「たとえの説明」の間に置かれ、弟子たちが「たとえで語る理由」を問うことに対する応答として語られている。「種蒔きのたとえ」を巡る一連の教えは、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えている。しかし、「たとえ」と「たとえの説明」の間に置かれた「たとえで語る理由」についての教えは、マルコおよびルカと比べてマタイが大きく拡大している。マタイが拡大しているのは、12～13 節および 15～17 節の部分で、12 節についてはマルコおよびルカが一連の教えの異なる文脈箇所では伝えている。

・14～15 節は、「イザヤ書」6:9～10 の七十人訳(ギリシア語訳旧約聖書)からの引用とされる。

・「たとえで語る理由」が、「マルコ」では、「(弟子たちには)神の国の秘密が打ち明けられている」が他の者にはそうではないためと告げられているのに対して、「マタイ」は「ルカ」と共に、「秘密を悟ることが赦されているか、いないか」という違いによることとして告げられている。おそらく、「マタイ」と「ルカ」では、「マルコ」が関連する預言として引用した聖句と整合させるような説明に調整しているのであろう。そのことによって、「マタイ」は、その意味をさらに明瞭にする必要性を考慮して、16～17 節の説明を加え、「弟子たち」と「それ以外の者」との違いを強調することになったのかもしれない。あるいは、「マタイ」は、そもそも弟子たちの教会の教えを「主イエスの弟子たちだけが保持する秘密の教え」と考えていたのかもしれない。

・「たとえ」の原語「パラボレー」の原義は、「傍らに(パラ)投げる(バッロー)こと」。広義に「比喩」の意味で用いられるほか、「格言／警告」の意味でも用いられる。

## 来週の誕生日 (2月9日～15日)

## 主日礼拝の讚美歌から

・21-356「インマヌエルの主イエスこそ」(= I 161)は、作詞者アレンドルフは、18 世紀ドイツの牧師で、敬虔派詩人として知られ、J.S.バッハと入れ違いにケーテン宮廷説教者としても務め、『ケーテン讚美歌集』を編纂。その中の一曲で、作曲者は不明。

・21-51「愛するイエスよ」(I-19 番「みこえきくとて」)は、17 世紀ドイツの牧師クラウスニツァーの作詞で、各国で広く歌われている讚美歌。「説教の前に」という原題が付されている。曲は、17 世紀ドイツの教会音楽家アーレの作曲で、最初はアドヴェントの独唱曲のために作られたが、後に出版された讚美歌集でクラウスニツァーの歌詞と組み合わせられた。

・21-519「イザヤを招く神の声は」(= I 392「神のみこえはむかしのごと」)は、20 世紀前半に米国で活躍したユニテリアン派牧師 J.H.ホームズの作詞。19 世紀ウェールズの音楽家 W.ロイドの曲と組み合わせられ、メソジスト讚美歌に採用されてきた。『21』編纂に際して、原歌詞に即して大幅に改訳されている。

## 21-356「インマヌエルの主イエスこそ」

## Einer ist König, Immanuel sieget

1. Einer ist König, Immanuel sieget! / Bebet, ihr Feinde, und gebet die Flucht! / Zion hingegen, sei innig vergnügt, / labe dein Herze mit himmlischer Frucht! / Ewiges Leben, unendlichen Frieden, / Freude die Fülle hat er uns beschieden.
2. Stärket die Hände, ermuntert die Herzen, / trauet mit Freuden dem ewgen Gott! / Jesus, die Liebe, versüßet die Schmerzen, / reiñt aus Ängsten, aus Jammer und Not. / Ewig muß unsere Seele genesen / in dem holdseligsten lieblichen Wesen.
3. Halte, o Seele, im Leiden fein stille, / schlage die Rute des Vaters nicht aus; / bitte und schöpfe aus göttlicher Fülle Kräfte, / zu siegen im Kampfe und Strauß! / Fluten der Trübsal verrauschen, vergehen; / Jesus, der Treue, bleibt ewig dir stehen.
4. Zion, wie lange hast du nun geweinet? / Auf und erhebe dein sinkendes Haupt! / Siehe, die Sonne der Freuden erscheint / tausendmal heller, als du es geglaubt. / Jesus, der lebet, die Liebe regieret, / die zu den Quellen des Lebens dich führt.
5. Laufet nicht hin und her, eilet zur Quelle! / Jesus, der bittet: "Kommt alle zu mir!" / Sehet, wie lieblich, wie lauter und helle / fließen die Ströme des Lebens allhier! / Trinket ihr Lieben, und werdet erquicket: / hier ist Erlösung für alles, was drückt.
6. Streitet nur unverzagt, seht auf die Krone, / die euch der König des Himmels anbeut. / Selber der Herr wird den Siegern zum Lohne; / wahrlich, dies Kleinod verlohnet den Streit! / Streitet nur unverzagt, seht auf die Krone: / selber der Herr wird den Siegern zum Lohne.
7. O du Lamm Gottes, da, da wird man sehen / eine gewaltige, siegende Schar / deine unendliche Hoheit erhöhen. / Alles, was Odem hat, ruft: / Er ist's gar! Sehet, / wie Kronen und Throne hinfallen; / höret, wie donnernde Stimmen erschallen.
8. Reichtum, Kraft, Weisheit, Preis, Stärke, Lob, / Ehre Gott und dem Lamme, dem Heiligen Geist! / Wenn ich da stünde, o wenn ich da wäre! / Springet, ihr Bande, ihr Feseln zerreiñt! / Amen, die Liebe wird wahrlich erhören. / Alles, was in mir ist, lobe den Herren!

## 21-51「愛するイエスよ」

## Liebster Jesu, wir sind hier, dich und dein wort

1. Liebster Jesu, wir sind hier, / Dich und Dein Wort anzuhören; / lenke Sinnen und Begier / hin auf Dich und Deine Lehren, / dass die Herzen von der Erden / ganz zu Dir gezogen werden.
2. Unser Wissen und Verstand / ist mit Finsternis verhület, / wo nicht Deines Geistes Hand / uns mit hellem Licht erfüllet; / Gutes denken, tun und dichten / musst Du selbst in uns verrichten.
3. O Du Glanz der Herrlichkeit, / Licht vom Licht, aus Gott geboren, / mach uns allesamt bereit, / öffne Herzen, Mund und Ohren; / unser Bitten, Flehn und Singen / lass, Herr Jesu, wohl gelingen.

## 21-519「イザヤを招く神の声は」

## The Voice of God is Calling

1. The voice of God is calling / its summons in our day; / Isaiah heard in Zion, / and we now hear God say: / "Whom shall I send to succor / my people in their need? / Whom shall I send to loosen / the bonds of shame and greed?"
2. "I hear my people crying / in slum and mine and mill; / no field or mart is silent, / no city street is still. / I see my people falling / in darkness and despair. / Whom shall I send to shatter / the fetters which they bear?"
3. We heed, O Lord, your summons, / and answer: Here are we! / Send us upon your errand, / let us your servants be. / Our strength is dust and ashes, / our years a passing hour; / but you can use our weakness / to magnify your power.
4. From ease and plenty save us; / from pride of place absolve; / purge us of low desire; / lift us to high resolve; / take us, and make us holy; / teach us your will and way. / Speak, and behold! we answer; / command, and we obey!